

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 31日現在

機関番号：32623

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720217

研究課題名（和文） 認知言語学の〈事態把握〉の実証研究と第二言語習得への影響

研究課題名（英文） A cognitive linguistic study of “construal” and of the influence which the difference in construal has on second language acquisition

研究代表者

ソ ミンジョン (SEO MINJUNG、徐 珉廷)

昭和女子大学・総合教育センター・非常勤講師

研究者番号：20573413

研究成果の概要（和文）：日本語話者と韓国語話者の〈事態把握〉のスタンスの異同を確認し、その差が第二言語習得の転移として現れるかということを検討した。日本語話者、韓国語話者、韓国人日本語学習者、日本人韓国語学習者を対象にシナリオ作成法の調査を行い、日本語話者の〈事態把握〉が韓国語話者や韓国人日本語学習者のそれより主観的な傾向があることを明らかにした。さらに〈事態把握〉のスタンスの異同が第二言語習得へ及ぶ影響を検討した結果、韓国人日本語学習者は主観的な〈事態把握〉の過剰使用、日本人韓国語学習者は回避が見られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present project is to examine whether the habitual difference in construal between Japanese and Korean speakers has any effect on the way they learn their second languages. For this purpose, I have requested both Japanese and Korean speakers to comment on a number of passages written in their respective native languages. My investigation, has revealed that in general, speakers of Japanese tend toward ‘subjective construal’ more readily than Korean speakers and that Korean learners of Japanese are found often using subjective construal excessively, while Japanese learners of Korean tend to be rather restrictive in their use of subjective construal.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：事態把握、日韓対照、第二言語習得、認知言語学

1. 研究開始当初の背景

(認知言語学) (cognitive linguistics)では、

話者が発話に先立って行うこの種の認知的な営み—言語化に先立って、話者が言語化の

対象とする事態について何を表現し、何を表現しないか、そして表現するものについてはどれをどのように表現するか、つまり自らの関連で言語化しようとする事態を自らの関連でどう意味づけるかという営みのことを〈事態把握〉と呼んでいる。そして、この点について、どの言語の話者でも、同じ事態であってもいくつかの異なったやり方で捉え、違ったやり方で表現するという能力を有していて、時と場合によってそれらを使い分けるといふ営みをしている、という普遍的な側面があると想定している。

本研究では、ここから一步踏み込んだ理論的な枠組みとして、これに次のような相対性に関わる想定を追加する。ある事態がいくつかの違ったやり方で把握されうるとしても、中立的な状況で、ある言語の話者が好んでする〈事態把握〉の仕方と、別の言語の話者が好んでする〈事態把握〉の仕方は必ずしも一致するとは限らない。つまり、ある事態を認知的にどのように把握し、言語化するか—その際の〈好まれる言い回し〉に関しては言語によって話者の好みに差が認められる。本研究は、そのような視点から、日本語話者と韓国語話者の〈事態把握〉に際しての〈好まれる言い回し〉(fashions of speaking)の異同について考察を試みた。

〈事態把握〉には、〈主観的把握〉と〈客観的把握〉と呼ばれる対立がある。〈主観的把握(subjective construal)〉とは、話者が言語化しようとする事象の中に自分の身を置き、自分の知覚する事象を自分の体験として〈自己中心的〉なスタンスで描くという捉え方を言い、〈客観的把握(objective construal)〉とは、話者が言語化しようとする事象の外に身を置き、自分の知覚する事象を〈客体化〉し、〈客観的〉なスタンスで描くという捉え方を言う(池上嘉彦(2006a)『英語の感覚・日本語の感覚—〈ことばの意味〉のしくみ』日本放送出版協会、NHK ブックス他)。

研究開始当初(研究計画は 2009 年)の時点で、〈事態把握〉および〈好まれる言い回し〉に関する研究は日本語と英語、日本語と中国語が多く、韓国語との対照は少なかった。先行研究によると日本語話者は〈主観的把握〉の傾向が強く、英語話者と中国語話者は〈客観的把握〉の傾向が強いと言われてきた。また日本語と類型論的に近い言語である韓国語との対照を通して、日本語話者の方が韓国語話者より〈主観的把握〉に傾いていることが確認される(徐 2008a~d, 2009a~b)。日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉という理論はその理論的インパクトは大きいものの、それを支持する実証研究は断片的であった。同時に、この種の研究であまり成されてこなかった、言語

の異なる話者間で〈事態把握〉のスタンスのずれが第 2 言語習得における中間言語への〈転移〉として現れるのではないかと考え、本研究の立案に至った。

2. 研究の目的

本研究は、認知言語学でいう〈事態把握〉に注目し、日韓小説とエッセイ、そして翻訳を用いて日韓両言語話者の〈事態把握〉のずれが見られるだろうと想定した言語的指標を取り上げた上で、実証調査を通してその妥当性を確認する(研究課題(1))。さらに、日韓両言語の話者間の〈事態把握〉の相違が学習者の中間言語に一定の〈転移〉として現れるかという問題を検討し(研究課題(2))、その結果を日本語教育と韓国語教育へと応用することを目的とした。

3. 研究の方法

3.1 言語的指標の想定

日韓小説とエッセイ、その翻訳を用いて日本語話者と韓国語話者において同じ事態を語る際に〈事態把握〉のスタンスにずれが見られると想定できる言語的指標の調査を試みた。これに基づき、以下の①~⑥を調査対象として選び、さらにこれらを(1)~(3)のカテゴリーに分類した。また〈主観的把握〉をはかる基準として、先行研究をふまえて本研究では、次のような分析枠組みを考えた。

カテゴリー(1) 〈自己〉のゼロ化

言語的指標：話者の非明示(①私、②私たち)
判断基準：話者が関係する場合、話者が明示されていない場合(自己投入)は明示されていない場合(自己他者化)より主観性が高い。

カテゴリー(2) 事態と事態の当事者としての話者との関わり

言語的指標：③補助動詞としての「てくる」
④授受補助動詞
⑤受身文

判断基準：話者が関係する場合、「てくる、てくれる、てもらう、受身」は視座が話者にある表現である。これらの言語表現が典型的・頻繁・義務的に使用されている言語の方がより〈主観的把握〉の傾向が強い。

カテゴリー(3) イマ・ココにこだわる度合

言語的指標：⑥時制の揺れ
判断基準：過去の出来事を今、目の前で起こっているかのように非過去形で表わす場合が多い言語の方が〈主観的把握〉に傾いている。

3.2 アンケート調査

調査方法は、조은숙(2009)を参考にシナリ

才作成法のアンケート調査を実施した。調査紙については、3.1の調査項目が入るように考えたストーリーをもとに、提示された状況で会話になるよう、シナリオを作成し、日本語版と韓国語版を用いた。調査紙のシナリオは調査者本人が作成し、日本語版は日本語母語話者に自然な日本語に直してもらった。調査紙の質問は全部で18問である。

被験者は会話の流れに沿ってその状況の中で自然と思われる発話を①と②で選択する形式であるが、③に自由記入欄をおき、選択肢の中で該当するものがないと思われる時は発話を直接記入するよう、指示した。また登場人物の中で主人公は被験者自身になるよう、設定した。

調査は2011年9月と11月に韓国人日本語学習者72名、韓国語話者95名、同年12月に日本語話者105名を、2012年6月～7月に日本人韓国語学習者60名を対象に実施した。韓国人日本語学習者は、韓国国内の大学で日本語を専攻あるいは副専攻している大学生(3年生～4年生)であり、日本語学習歴2年以上に限定した。韓国語話者は日本語の影響を避けるために日本語歴がない、あるいは初級の韓国国内の大学生に限定した。また日本人韓国語学習者は、日本国内の大学で韓国語を専攻している大学生(2年生～4年生)であり、韓国語学習歴は1年以上10年未満に限定した。

調査協力者の背景情報を含む調査結果をデータベース化し、日本語話者と韓国人日本語学習者、韓国人日本語学習者と韓国語話者の間に違いがあるかを統計処理(カイ二乗検定)して、検討した(有意水準 $p < .05$)。自由記述欄の回答は、〈主観的把握〉の言語的指標が現れたかどうかで判断し、分析を行った。

4. 研究成果

4.1 研究課題(1)―日本語話者と韓国語話者、日本語話者と韓国人日本語学習者の〈事態把握〉のスタンスの異同

本研究では、まず日本語話者と韓国語話者の〈事態把握〉のずれが観察されるであろうという予測のもとに、3.1で挙げた6つの言語的指標について調査したあと、同じ方法で日本語話者と韓国人日本語学習者の〈事態把握〉の異同の調査を行ったところ、以下の結果が得られた。

(1) 概ね予測どおりの有意差が見られた項目は以下のとおりである。

- ①私の非明示
- ②「私たち」の非明示
- ③ある行為と話者とのかわりの「てくる」
- ④授受補助動詞「てくれる」

⑤直接受身、他動詞の間接受身

これらの項目では、日本語話者と韓国語話者のそれぞれの母語に観察される〈事態把握〉は、日本語話者が韓国語話者より〈主観的把握〉が高く、また韓国人日本語学習者の産出する日本語と日本語話者を比べてみても、日本語話者の方がより主観的な〈事態把握〉に傾いていることが確認された。

(2) ③補助動詞としての「てくる」のうち、〈出現の過程〉、⑤受身のうち、直接受身、自動詞の間接受身、⑥時制の揺れについては必ずしも仮説を確認することができなかった。これらのうち、中立受身とも呼ばれる直接受身は日本語と韓国語ともに動作主側に視座を置く能動文より話者側に視座を置く直接受身(主語着点動詞)を用いる傾向があり、両者ともに〈主観的把握〉に傾いていることが確認された。

4.2 研究課題(2)―〈事態把握〉の相違が第2言語習得に及ぼす影響

本研究では、母語話者間の〈事態把握〉のずれ、つまり目標言語と異なる学習者の第1言語の〈事態把握〉のスタンスが第2言語の中間言語に転移として現れるかを見るため、韓国人日本語学習者と韓国語話者の両者間にカイ二乗検定を行った。その結果、以下のような結果が得られた。

(1) 3.1で挙げた言語的指標のうち、③授受補助動詞の「てくれる」と⑤の受身文のうち、間接受身は、有意差が認められず、両者の間に差があるとは言えない結果となった。つまり、これらの項目に限っていうならば、母語の影響がある可能性があると言える。

(2) 次の項目では、第2言語のある文法項目をその文法項目が適用できない他の項目にまで当てはめてしまい、結果的に母語話者より多用する現象(本研究では、過剰使用と呼ぶ)が見られた。

- ③状態変化の「てくる」
〈出現の過程〉の「てくる」
- ④「使役+て頂く」、
- ⑤「自動詞の間接受身」

これらの項目は、4.1の分析結果である日本語話者と韓国語話者、そして日本語話者と韓国人日本語学習者における〈事態把握〉の有意差と比べてみても、近接した傾向を示さない。またこれらの言語的指標は学習者の第1言語である韓国語に対応する表現が存在しないことが共通している。以上のことから、本調査における韓国人日本語学習者の過剰

使用は、学習者の母語の影響だとは言いにくい。

(3) 一方、同じ方法で日本人韓国語学習者と日本語話者の調査では、④授受補助動詞の「てくれる」や⑤受身文のうち、直接受身と他動詞の間接受身では、使用を回避しようとする傾向が見られた。

なぜこのように韓国人日本語学習者は主観的な〈事態把握〉の過剰使用が見られ、日本人韓国語学習者は回避が見られたのかについては、日本語と韓国語の授業、使用教材の説明に問題があることや母語にない言語表現は意識しすぎてしまう学習者の心理的な面を考えられるが、この理由に関する綿密な検討は今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

徐 珉廷(2013)「日韓母語話者と韓国人日本語学習者の〈事態把握〉—シナリオ作成法調査の結果から—」『学苑』No. 871、pp. 51-65、昭和女子大学、(査読あり)。

徐 珉廷(2010)「日本語話者の〈好まれる言い回し〉としての「ていく/くる」の補助動詞的な用法—対応する韓国語の「e kata/ota」との比較を通して—」『日本認知言語学会論文集』第 10 巻、pp. 248-258、日本認知言語学会、(査読あり)。

[学会発表] (計 3件)

徐 珉廷(2012年 8月 18日)「日韓母語話者と韓国人日本語学習者の〈事態把握〉—シナリオ作成法調査の結果から—」日本語教育国際研究大会名古屋 2012、名古屋大学(愛知県)。

徐 珉廷(2012年 4月 28日)「日本語話者と韓国語話者の主観的な〈事態把握〉—シナリオ作成法調査結果から—」朝鮮語研究会、東京大学(東京都)。

徐 珉廷(2011年 8月 20日)「日本語話者と韓国語話者の〈主観的把握〉の対比」2011世界日本語教育大会、天津外国語大学(中国・天津市)。

[図書] (計 2件)

徐 珉廷(2013)『〈事態把握〉における日韓話者の認知スタンス—認知言語学の立場から見た補助動詞的な用法の「ていく/くる」と「e kata/ota」の主観性—』ココ出版、総 239 ページ。

徐 珉廷(2010)『〈사태 파악〉의 한일대조연

구 —‘ていく/くる’와 ‘어 가다/오다’의 보조동사용법을 중심으로— (〈事態把握〉の日韓対照研究— ‘ていく/くる’と‘e kata/ota’の補助動詞用法を中心に—)』제이앤씨(J&C 出版社)、総 290 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

◎ ソ ミンジョン (SEO MIN-JUNG, 徐珉廷)
昭和女子大学・総合教育センター・非常勤講師
研究者番号：20573413

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

研究協力者

◎ イム ジリョン (LIM JI-RYONG)
慶北大学校・国語教育学科・教授

◎ 申 惠環 (SHIN HAE-KYONG)
西江大学校・日本学主任教授

◎ 慎 仙香 (SHIN SEON-HYANG)
蔚山大学校・日本語日本学科・教授

◎ 金 東完 (KIM DONG-WAN)
蔚山大学校・日本語日本学科・教授